

国分寺に住む

下平 眞理

国分寺駅南口を出て駅を背に新宿方向に坂を下りながら商店街を歩くと国分寺街道に行き当たる。その信号まで来ると高架線走る中央線が見える。

信号を渡ってしばらく行くと左手側に斜面の住宅地が現れる。国分寺崖線、いわゆるはけと呼ばれる地域である。国分寺崖線は古多摩川が武蔵野台地を削った河岸段丘で、世田谷まで達している。

もう八十年以上前、商売で成功した義父が両親の住居を建てるために購入した土地は大きなホタテの貝殻を伏せたような、なだらかで底辺の広い丘陵地の西側の一部分で、丘陵地帯は高低差を変えながら武蔵小金井の方まで続いている。

今は道路となっている低い場所はかつて野川が流れていて、そこから見上げると中央線の線路、その中腹よりやや低い場所に我が家がある。

購入当初は雑木林の山林で、倉庫を整理している時に出てきた白い縁取りが黄ばみ丸まっている小さな写真には、その中にうずくまるように座っている義父とそのお父さんが写っている。お父さんはのんびり屋で日がな日当たりのよい縁側で昼寝をしているような人だったらしい。

そのお父さんが近所の植木屋さん、石屋さんと相談しながら何年もかけて山林を日本庭園にと造り替えた。敷地の周りを石垣積みにし、飛び石と松を配置、灯籠を置き、水路を作り湧き水を引き、低い場所に池、そして浮島、噴水。素人の造園にしては地形を生かした庭園になった。

隣地との境には武蔵野の面影が残る榎の太木があり、冬の間は灰色の幹をむき出しにして聳え立っているが、春先には柔らかな黄緑色の芽が日ごと数を増し大きな緑の塊となる。雑木林の頃からの山桜は老木となり伐採されたが、桜の季節の終わるころ丘陵地のまだどこかに残っている山桜の花びらが舞ってくる。

初孫が生まれたとき、義父は池の傍に紅白の花が咲く梅を植樹した。その孫が今年五十歳、梅の花が咲き始めた。